

〈研究論文〉

和歌(短歌)の表現技法

体言止めと句切れ(とりわけ四句切れ)との相関について

(NPO 法人全日本大学開放推進機構 監事) 浅岡 純朗

Art of description in the WAKA (Japanese thirty-one
syllabled poems): A study on the interrelation between
noun endings and forth phrase endings

..... ASAOKA SUMIAKI



はじめに

(一) 歌体の変遷——和歌から短歌へ

谷山茂氏によれば、和歌の歴史の実態としては、「短歌(5・7・7・7)を中心に、長歌(5・7・5・7・7)、旋頭歌(5・7・7・5・7・7)、片歌(5・7・7)、その他(5・7・5・7・7・7 仏足石歌)の範囲に限られる。(中略)短歌という名称が和歌に取って代わるのは、明治の和歌革新運動以後である。それ以後は和歌ということばは古典和歌にのみ通用し、近現代の和歌は短歌とよばれる。」とある。

(注 1)

(二) 和歌における文の構成——2 句単位から句単位へ

和歌における歌体の変遷や歌風の展開をたどっていくと、本質的には、「5・7 音の繰り返しを減少させようとする衝動」が通底していて、これが一つには長歌形式から短歌形式への流れを、二つには短歌形式の和歌における二句切れ、四句切れから初句切れ、三句切れへの流れを形成した、と考えられる。

他方、句切れの多用によって、ともすれば切れ切れになりかねない和歌表現の流れを、何とかして続けようという動機も表われてくる。いったいに、「和歌の一般的なあり方としては、自然の発想のままの順序どおりに、句切れなしに表現することであろう。無句切れの歌が、和歌・短歌を通じて数が多いということは、和歌・短歌の一般的な通用性のさながらな表われ」(注 2)とするならば、短歌形式の和歌の句の終わりに、接続助詞「ば」に代って現われる接続助詞「て」「して」はその明らかな証左である。そうすると、歌体の変遷も歌風の展開も、うんと縮めて言うならば、「5・7 音の繰り返し減少」を舞台とする「切れようとする動機」と「続けようとする動機」とのせめぎ合いの結果であり、その道具として、いろいろな表現技法が考案されたのではないか。これから検証を試みようとする「体言止め」も、31 文字という短い定型詩に意外性や余情性といった複雑な内容を詠み込もうとする意欲の表れ、と見る事ができる。

(体言止めの定義)

歌の末尾を体言(名詞)で止める技法。述語の部分の欠けた印象から、読み手にその後を想像させる。(この技法は万葉集から見られる。筆者注)余情を重んじた『新古今和歌集』の時代に特に多く用いられた。(注3)

一 万葉集及び八代集の和歌(短歌)に見られる体言止め

(一) 万葉歌の体言止め

峯村文人氏(前出・注1)によれば、この表現技法は、万葉集から見られ、その体言には、倒置法により、

① 上に置く述語または述部の主語を表わす場合

いづくにか ふなはてすらむ あれのさき こぎたみゆきし たななしをぶね (巻一・雑歌・五八・高市連黒人)

② 上に置く述語または述部の連用修飾語を表わす場合

このくれに なりぬるものを ほととぎす なにかきなかぬ きみにあへるとき(巻一八・四〇五三・久米朝臣広縄)

③ 述語または述部や感動の助詞の省略される場合

はるのその くれなゐにほふ もものはな したでるみちに いでたつ おとめ(巻一九・四一三九・大伴宿祢家持)

の3様があるという。

(二) 八代集歌の体言止め

武内章一氏ほか(注4)によれば、二一代集の各歌集での体言止め歌が全体に占める割合を調査したところ、①古今歌から詞花歌までは10パーセント以下であるのに対して、千載歌は13.4、新古今歌が23.6となり、以後、新勅撰歌、続後拾遺歌がわずかに少ないものの、一三代集ではほぼ20パーセントを越えること、②四季・恋・雑に分けると、体言止めの増加は四季の歌にかたよっていること、などが判明した、という。

また、柏木由夫氏(注5)によれば、古今歌にかかる「体言止歌の文法的構造」は次の6種類に分けられる、としている。

a 感動詞(〜だよ。)

谷風にとくるこほりのひまごにうちいづる浪や春のはつ花(巻一・春歌上・一一・源まさずみ)

b 主語(〜は)

花のちることやわびしき春霞たつたの山のうぐひすのこゑ(巻二・春歌下・一〇八・藤原のちかげ)

c 連用修飾(〜に、〜を等)

ちりをだにすゑじとぞ思ふさきしよりいもとわがぬるとこ夏のはな(巻三・夏歌・一六七・みつね)

d 呼びかけ(〜よ。)

花の色はかすみにくめて見せずともかをだにぬすめ春の山かぜ
(巻二・春歌下・九一・よしみねのむねさだ)

e 原因・理由(〜のために、〜によると)

桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲(巻一・
春歌上・五九・つらゆき)

f その他(〜のように等)

立帰りあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつ白浪(巻一・
恋歌一・四七四・在原元方)

二 句切れと体言止めの相関

体言止めという表現技法は、無句切れの歌でも句切れの歌でも用いられる。別表 1 のとおり、①万葉歌にあつては、前者 1325 首中 83 首(6%)、後者 770 首中 71 首(9%)、②古今歌にあつては、前者 680 首中 21 首(3%)、後者 411 首中 37 首(9%)、③句切れの転換点とみなされる拾遺・後拾遺歌にあつては前者 1605 首中 62 首(4%)、後者 949 首中 106 首(11%)、他方、④体言止めの繁用の転換点と目される千載歌にあつては、前者 788 首中 62 首(8%)、後者 494 首中 118 首(24%)、八代集中最も多用された新古今歌にあつては、前者 1213 首中 201 首(1

7%)、後者 765 首中 266 首(35%)と、体言止めの技法と句切れの技法との相関関係は句切れ歌に強く表われている。

(一) 位置別の句切れと体言止めの相関

前述したとおり、無句切れ歌と句切れ歌とでは後者の方が体言止めとの相関が強いことが判明したが、それでは、句切れのうちいかなる位置の句切れが体言止めとより密接な関係にあるかを分析したい。別表 1 によれば、①万葉歌にあつては、初句切れから四句切れまでいずれも平均値 10% から 1 桁以下の偏差であつて、特に強い相関のある句切れはない。②いわゆる八代集のうち、古今歌にあつては、初句切れから三句切れまでは平均値の 9% から 1 桁以下の偏差であるが、四句切れに限って初めて 2 桁(+10%)の偏差がみられ、やや強い相関を示した。③句切れの転換点とみなされる拾遺・後拾遺歌にあつても、初句切れから三句切れまでは平均値 12% から 1 桁以下の偏差であるが、四句切れに限っては 2 桁(+20%)の偏差が見られ、古今歌に増して相関が強まった。四句切れ・体言止めの組み合わせは繁用の転換点に入りつつあると言つてよいが、和歌(短歌)総数に占める体言止めの割合は 7% と、依然として 10% 未満にとどまったままである。④千載歌にあつて初めて、⑦和歌(短歌)総数に占める体言止めの割合が 14% となり、かつ、①

四句切れ歌に占める体言止めの割合の平均値からの偏差が +50%へと急騰した。これにより、四句切れと体言止めとの間に存在する強い相関関係が確認されるとともに、四句切れ表現と体言止めの文法的構造(文の成分)の組み合わせを分析する必要も生じたのである。⑤八代集の最終歌集である新古今歌にあつても、⑦総歌数に占める体言止めの割合は24%、①四句切れ歌に占める体言止めの割合は61%、句切れ総数の平均値37%からの2桁の偏差(+24%)が持続されている。

(二) 四句切れ表現の転換と体言止めの文法的構造(文の成分)の転換の組み合わせ

和歌(短歌)の2大表現技法である「句切れ」と「体言止め」は、いずれも、その多少・強弱はあつても、万葉歌の昔から用いられてきた。とは言え、前者にあつては、それまで優勢であつた二句切れ、四句切れが拾遺・後拾遺歌を一期として劣え、代りに初句切れ、三句切れが優勢となつたこと、また、後者にあつては、①万葉歌では句切れ歌の9%、無句切れ歌の6%、合計歌数の7%、②古今歌では同じく9%、3%、5%、③句切れの転換点とみなされる拾遺・後拾遺歌では同じく11%、4%、7%、④千載歌では同じく24%、8%、14%と、体言止めが和歌(短歌)総数の10%を超え、体言

止め技法の転換点として注目されるところとなつた。さらに、⑤新古今歌でも句切れ歌の35%、無句切れ歌の17%、合計歌数の24%を占めるに至つた。このことから、体言止めという表現技法は、句切れという表現技法と強い相関関係にあることが明らかになつたばかりでなく、句切れの中でも、初句切れと三句切れに比べ、四句切れとの相関が最も強いことも判明した。

千載歌をもつて「四句切れ・体言止め」という表現技法の転換点と目すると、当然のことながら、転換前の拾遺・後拾遺歌におけるそれと、転換後の新古今歌におけるそれとの異同を比較する必要に迫られる。

そこで、別表2のとおり、横軸に四句切れの表現区間、縦軸に体言止めの文法的構造(文の成分)区間を設定し、各々の組み合わせにしたがつて分類・整理を試みた。

拾遺・後拾遺歌にあつては、①四句切れで最も多い表現区分は長文の述部が倒置したもの(99回中28回)、②これに対応する体言止め(39回中25回)、③その内訳で最も多い成分は修飾語(句)(19回中15回)である。

千載歌にあつては、①57回中29回、②42回中24回、③16回中14回)というように、四句切れの表現としては長文・倒置表現に集中しており、かつ、体言止めの文法的構造(文の成分)として

も修飾語(句)が依然として最多ではあるものの、独立語(句)、主語(部)への分散が見られることが特徴的であって、このことは、四句切れにおける体言止めへの文法的構造(文の成分)の転換点の存在を確信させる。

新古今歌にあつては、千載歌でいったんは上昇した①は141回中47回と拾遺・後拾遺歌並みの水準まで低下、これに対応する②は86回中35回と水準を低下させただけでなく、その内訳でも、③16回中11回と、首位を主語(部)14回に譲ってしまった。ここで明らかになったことは、四句切れの表現で顕著に増えたのは「呼びかけ」の述部が倒置して前に出たもので141回中35回、これに対応する体言止めは86回中26回、その文法的構造(文の成分)は独立語(句)の呼びかけ26回中24回となった。

要するに、古今歌以来減り続ける二句切れ、四句切れにあつて、とくに四句切れの表現は、結句の体言止めの文法的構造(文の成分)を、修飾語(句)∨独立語(句)(その他)↓修飾語(句)∨独立語(句)(呼びかけ)↓独立語(句)(呼びかけ)∨主語(部)というように使い分けながら生き残ってきたことになる。以下に、四句切れの表現と体言止めの文法的構造(文の成分)との組み合わせの變化がどのように進展したかを類歌で示す。

三 四句切れ・体言止めの類歌

(一) 拾遺・後拾遺歌——四句切れの転換点・体言止めの転換前

春ふかみるでのかは浪たちかへり見てこそゆかめ／山吹の花(拾遺・卷一・春・六八・源したがふ)

四句切れ「…見てこそゆかめ」は長文の述部が倒置して前に出たもので、結句は「山吹の花ヲ」と修飾語(句)となる。

露けてわが衣手はぬれぬとも折りてをゆかん／秋はぎの花(拾遺・卷三・秋・一八二・みつね)

四句切れ「…折りてをゆかん」は長文の述部が倒置して前に出たもので、結句は「秋萩の花ヲ」と修飾語(句)となる。

あふさかの関のし水に影見えて今やひくらん／もち月のこま(拾遺・卷三・秋・一七〇・つらゆき)

四句切れ「…今やひくらん」は長文の述部が倒置して前に出たもので、結句「望月の駒ヲ」と修飾語(句)となるか、又は、「…今ゴロハ引カレイルダロウカ」とすれば、結句「望月の駒ハ」と主語(部)の文法的構造となる。

こゆるぎのいそぎてきつるかひもなくまたこそたてれ／おきつしらなみ(拾遺・卷一九・雑恋・一二二四・よみ人しらず)

四句切れ「…またこそたてれ」は長文の述部が倒置して前に出たもので、結句「おきつしらなみノヨウニ」と独立語(句)(その他)とな

る。

みやこをばかすみとともにたちしかど秋風ぞふく／しらかはのせき(後拾遺・抄九・羈旅・五一八・能因法師)

四句切れ「…秋風ぞふく」は長文の述部が倒置して前に出たもので、結句「しらかはのせきデハ」と独立語(句)(その他)となる。

このように、拾遺・後拾遺歌にあつては、四句切れが「長文の述部が倒置されて前に出る」とともに、結句は「…ヲ」、「…ニ」として「述部にかかる修飾語(句)」の形をとる、ことが多かった。

(二) 千載歌——四句切れの転換後・体言止めの転換点の推定

山かぜにちりつむ花のながれずはいかでしらし／谷のした水(巻

二・春歌下・一〇〇・花菌左大臣)

四句切れは「…いかで知らまし」と長文の述部が倒置して前に出たもので、結句は「谷のした水ヲ」と修飾語(句)が続く。

よとともにつれなき人の恋ぐさの露こぼれます／秋のゆふかぜ

(巻一一・恋歌二・七七二・藤原顕家朝臣)

四句切れは「…露こぼれます」と長文の述部が倒置して前に出たもので、結句は「秋の夕風ニ」と修飾語(句)が続く。

さつまがたおきの小島にわれありとおやにはつげよ／やへのしほかぜ(巻八・羈旅歌・五四二・平康頼法名性照)

四句切れは「…おやにはつげよ」と呼びかけの述部が倒置したも

ので、結句は呼びかけの対象が独立語(呼びかけ)「やへのしほかぜヨ」として続く。

ながむればかすめるそらのうき雲とひとつになりぬ／かへるかりがね(巻一・春歌上・三七・左近中将良経)

四句切れ「…ひとつになりぬ」と長文の述部が倒置したもので、結句は「かへるかりがね」と主語(部)が続く。

このように、千載歌にあつては、四句切れが「長文の述部が倒置されて前に出る」のは拾遺・後拾遺歌と同様であるが、結句は主語(部)、独立語(句)(とりわけ呼びかけの「…ヨ」が徐々にふえつつあつて、これが、体言止めの文法的構造(文の成分)の転換点を推定させる決め手になった。

せる決め手になった。

(三) 新古今短歌——四句切れ・体言止めの転換後

むかしおもふくさのいほりのよるの雨に涙なそへそ／山時鳥(巻

三・夏歌・二〇一・皇太后宮大夫俊成)

いそなれで心もとけぬこも枕あらくなかけそ／水の白なみ(巻一

〇・羈旅歌・九四六・権中納言定頼)

うき草のひとはなりとも磯がくれ思ひなかけそ／おきつしら波(巻二〇・釈教歌・一九六二・寂然法師)

四句切れは「…涙なそへそ」、「…あらくなかけそ」、「…思ひな

けそ」で、ともに呼びかけの述部が倒置したものの。結句は「山時鳥ヨ」、「水の白なみヨ」、「おきつしらなみヨ」とそれぞれの対象に呼びかけている。

かはづなくかみなみ川にかけ見えていまかさくらむ／山吹の花
(巻二・春歌下・一六一・厚見王)

四句切れは「…いまかさくらむ」と長文の述部が倒置され、結句は「山吹の花」と主語(部)が続く。

あすよりはしがの花ぞのまれにだにたれかは問はむ／花のふる里
(巻二・春歌下・一七四・撰政太政大臣・藤原良経)

四句切れは「…たれかは問はむ」と長文の述部が倒置され、結句は「春のふる里」と修飾語(句)が続く。

もつとも小林和彦氏(注6)は、この歌の「春のふる里」を、「このよ
うな構成では、結句の体言句が極めて圧縮されるものとなって、文
の形を取りにくいのである。」と言っている。「春のふる里」を、①春の
故郷トナツテシマウしがの花ぞの」の意として修飾語(句)と見る、②
「春のふる里ヨ」と独立語(句)(呼びかけ)と見る、③「春のふる里ト
ナツテシマウナ(コトヨ)」と詠嘆をこめた文の断片と見る、といった
様々な立場が生じうる、とも述べている。「いずれにもせよ、作者は
論理的な構造をこわして、心象を端的に呈示しているので、この時
代の作風(象徴的であろうとする表現態度。筆者注)を示すもので

ある。」と結論づけている。

新古今歌にあっても、四句切れが「長文の述部が倒置されて前
に出る」ことが多かったが、これを受ける結句の体言止めは修飾語
(句)が減って、独立語が過半を占めるようになり、とりわけ「呼び
かけ」の対象が増加したことが特徴的である。これは、四句切れ・体
言止めが呼びかけ表現に適しているばかりでなく、体言止めの文法
的構造(文の成分)が読み手の印象しだいで主語(部)にも独立語
(句)にも解釈できることを示している。

おわりに

繰り返しになるが、和歌(短歌)における2大表現技法である句
切れと体言止めとの相関を探る試みは、興味深い結果にたどり着
いた。

別紙1のとおり、句切れにあつては万葉歌の二句切れ、四句切れ
から、その転換点とみなされる拾遺・後拾遺歌を経て、新古今歌の
初句切れ、三句切れに変遷したし、体言止めにあつては万葉歌の
7%、その転換点とみなされる千載歌の14%を経て、新古今歌の
24%に到達した。また、体言止めが句切れ歌と無句切れ歌に用い
られた割合は、万葉歌9%対6%、拾遺・後拾遺歌11%対4%、
千載歌24%対8%、新古今歌35%対17%と、句切れとの密接

な関係にあることが明らかになった。

(一) 四句切れと体言止めの相関

初句切れく三句切れに用いられた体言止めの割合が句切れ歌の平均値以下であるのに比べ、とりわけ四句切れ歌にあつては偏差が著しく、古今歌 + 10%、拾遺・後拾遺歌 + 20%、千載歌 + 50%、新古今歌 + 24% となっている。これは、四句切れと体言止めという二つの技法の間で、一方が他方の条件になっていること、具体的には、①体言止めは句切れの中で四句切れに最も適していること、もつと言え、②四句切れは体言止めによつて生き残れたことを推測させるのである。

(二) 四句切れの表現と体言止めの文法的構造(文の成分)の組み合わせ

別表 2 のとおり、四句切れで最も多い表現区分は長文・倒置表現であつて、このことは、拾遺・後拾遺歌、千載歌、新古今歌ともに変わらない。次に多い表現区分は、拾遺・後拾遺歌では短文・倒置表現であり、千載歌、新古今歌では呼びかけ・倒置表現が短文・倒置表現に取って代わった。他方、四句切れに続く体言止めで最も多い文法的構造(文の成分)は修飾語(句)であるが、新古今歌に至つて独立語(呼びかけ)に取って代わられた。これらを簡略に図示すれば、別表 3 のとおりとなる。

注

- 1 犬養寛氏ほか編集『和歌大辞典』(昭和 61・3・明治書院)、「和歌」(谷口茂氏)・「体言止め」(峯村文人氏)
- 2 松田武夫氏「修辞法の再検討・句切れ」『月刊文法』(昭和 44・2・明治書院)
- 3 山口堯一・鈴木日出男氏論『全訳全解国語辞典』(平成 16・10・文英堂)
- 4 武内章一氏ほか「二十一代集における体言止めについて」『名古屋大学国語国文学』9号(昭和 36・10)
- 5 柏木由夫氏「八代集の体言止め」『論集 和歌とレトリック』(昭和 61・9・和歌文学会・笠間書院)
- 6 築瀬一雄氏監修・小林和彦氏著『古典新釈シリーズ⑩新古今和歌集』(1977・9・中道館)
- 7 拙稿「和歌(短歌)における句切れとその原因となった表現にかかると最終的考察」『UEJ ジャーナル』第 23 号・二〇一七、22-33 頁。
- 8 テキスト ①万葉歌にあつては、『新編国歌大観』第二卷昭和五九・三・角川書店 ②古今歌・拾遺・後拾遺歌・千載歌・新古今歌にあつては『新編国旗大観』第一卷昭和五八・三・角川書店による。

(完)

浅岡 純朗 (あさおか すみあき)

特定非営利活動法人全日本大学開放推進機構監事・東京都社会保険労務士会千代田統括支部副支部長・昭和 45 年東京都立大学(現首都大学東京)人文学部卒業。厚生省(現厚生労働省)社会保険庁退職後、全国国民年金福祉協会連合会などを経て、平成 15 年から現職。平成 23 年二松学舎大学大学院文学研究科国文学専攻・博士後期課程単位取得退学。

別表1 句切れと体言止めの相関(→2つの技法の繁用転換点の分析)

転換点	歌集	区分	句切れ		体言止め		句切れ別体言止め (平均値)からの偏差	摘要	
			構成比	%	構成比				
					I	II			
体言止め・句切れの転換前	万葉歌	句切れ歌	770	37	71	46	9	1 句切れのある体言止め歌 > 無句切れの体言止め歌 万 9% : 6% (7%) 古 9% : 3% (5%) 拾・後拾 11% : 4% (7%) 千 24% : 8% (14%) 新古 35% : 17% (24%) *0 内は総歌数に占める体言止めの割合	
		初句切れ	19	2	2	3	11		+1
		二句切れ	365	44	31	39	8		△1 △2
		三句切れ	90	11	9	11	10		±0
		四句切れ	361	43	38	47	11		+1
		計	(835)	(100)	(80)	(100)	(10)		
		無句切れ歌	1325	63	83	54	6		
		計	2095	100	154	100	7		
		句切れ歌	411	38	37	64	9		
		初句切れ	20	4	1	3	5		△4
		二句切れ	199	43	17	43	9		△9 ±0
		三句切れ	162	35	7	18	4		△5
		四句切れ	80	18	15	38	19		+10
計	(461)	(100)	(40)	(100)	(9)				
無句切れ歌	680	62	21	36	3				
計	1091	100	58	100	5				
体言止めの転換前・句切れの転換点	拾遺・後拾遺歌	句切れ歌	949	37	106	63	11		
		初句切れ	99	9	4	3	4	△8	
		二句切れ	350	33	38	31	6	△19 △6	
		三句切れ	507	48	41	34	7	△5	
		四句切れ	99	9	39	32	32	+20	
		計	(1055)	(99)	(122)	(100)	(12)		
		無句切れ歌	1605	63	62	37	4		
		計	2554	100	168	100	7		
体言止めの転換点・句切れの転換後	千載歌	句切れ歌	494	39	118	66	24		
		初句切れ	55	10	9	7	16	△8	
		二句切れ	110	21	24	19	22	△16 △2	
		三句切れ	311	58	55	42	18	△6	
		四句切れ	57	11	42	32	74	+50	
		計	(533)	(100)	(130)	(100)	(24)		
		無句切れ歌	788	61	62	34	8		
		計	1282	100	180	100	14		
体言止め・句切れの転換後	新古今歌	句切れ歌	765	39	266	57	35		
		初句切れ	104	12	33	11	32	△5	
		二句切れ	175	21	51	17	29	△17 △8	
		三句切れ	421	50	138	45	33	△4	
		四句切れ	141	17	86	28	61	+24	
		計	(841)	(100)	(308)	(101)	(37)		
		無句切れ歌	1213	61	201	43	17		
		計	1978	100	467	100	24		

別表2 四句切れの表現と体言止めの文法的構造(文の成分)の組み合わせ I

期間 区分	表現区分		呼びかけ表現		倒置表現		繰り返し表現→短文表現		合計	
	同下位区分		呼びかけ	呼びかけ・倒置	長文・倒置	短文・倒置	短文	短文・省略 その他		
拾遺・後拾遺歌	四句切れ		(3) 3	(14) 14	(28) 28	(21) 21	(14) 14	(19) 19	(100) 99	
	体言止め		(3) 1	(5) 2	(64) 25	(18) 7	(10) 4	(-) -	(100) 39	
	文法的構造 (文の成分)	主語(部)		-	-	3	4	2	-	(23) 9
		修飾語(句)		1	-	15	2	1	-	(49) 19
		独立語(句)		-	2	7	1	1	-	(28) 11
		内訳	呼びかけ	-	1	1	1	-	-	3
			感動語	-	-	-	-	1	-	1
			その他	-	1	6	-	-	-	7
千載歌	四句切れ		(2) 1	(18) 10	(51) 29	(12) 7	(14) 8	(3) 2	(100) 57	
	体言止め		(2) 1	(19) 8	(57) 24	(17) 7	(-) -	(5) 2	(100) 42	
	文法的構造 (文の成分)	主語(部)		-	-	7	4	-	-	(26) 11
		修飾語(句)		-	-	14	2	-	-	(38) 16
		独立語(句)		1	8	3	1	-	2	(36) 15
		内訳	呼びかけ	1	7	-	-	-	-	8
			感動語	-	1	-	1	-	1	3
			その他	-	-	3	-	-	1	4
新古今歌	四句切れ		(4) 5	(25) 35	(33) 47	(16) 22	(16) 22	(7) 10	(100) 141	
	体言止め		(-) -	(30) 26	(41) 35	(22) 19	(2) 2	(5) 4	(100) 86	
	文法的構造 (文の成分)	主語(部)		-	-	14	6	-	-	(23) 20
		修飾語(句)		-	-	11	5	-	-	(19) 16
		独立語(句)		-	26	10	8	2	4	(58) 50
		内訳	呼びかけ	-	24	-	-	-	-	24
			感動語	-	1	3	2	1	-	7
			その他	-	1	7	6	1	4	19

別表3 四句切れの表現と体言止めの文法的構造(文の成分)の組み合わせⅡ(→繁用転換点の推定)

